

Nostromo に見る懐疑と自由

Scepticism and Freedom in *Nostromo*

中 村 嘉 男

YOSHIO NAKAMURA

I

Nostromo が F. R. Leavis からその “rich and subtle but highly organized pattern” を称揚されてすでに久しいが、同じ Leavis から指摘されたその ‘hollow’ な響きについては、今日まで様々な愚論がとびかっているように思われる。これらの愚論を形成しているのは、やはり Leavis の “... one might say that *Nostromo* was written by a Decoud who wasn't a complacent dilettante, but was positively drawn towards those capable of ‘investing their activities with spiritual value’ ...” に見られるような考え方であると言えよう。¹それは、何よりもまず、空ろさが否定すべき状態であることを前提とした考え方である。その空ろさを埋めるものとして、“spiritual value” を与えられた “activities” が考えられているのだ。注目すべきことは、空白を何か意味のあるもので埋めようとする西欧的思考方法が、*Nostromo* を論じるほとんどの批評家によってとられているということである。例えば、*Nostromo* への有名な序文を書いた R. P. Warren は、空ろさを作る Conrad の懐疑を “a reasonable recognition of the fact that man is a natural creature who can rest on no revealed values.” にすぎないと述べ、このような “reason”こそ “life and energy” を否定するものだとして極めつけている。その一方で Warren は、価値に従って生きることが Conrad の言う “illusions” であるかもしれないが、“illusions” は必要だと説くのだ。²

この Warren の、“scepticism” や “reason” に対する否定的な見方と “illusions” や “values” に対する肯定的な見方を完全に逆転させなければ、Conrad を理解することは不可能だと思われる。なぜなら Conrad にあっては、懐疑的な知性は人間を消去していくのではなく、逆に人間を見出ししていく手段になって

いるからだ。ここで言う懷疑とは、もちろん、Conrad が Galsworthy への手紙の中で述べていた “the tonic of minds, the tonic of life, the agent of truth—the way of salvation”³ としての懷疑である。真の懷疑は、幻想の奴隷になった人間を一時的にせよその状態から解放し、目の前の現実を目を開かせるのだ。それさえあれば、Lord Jim や Kurtz は幻想の完全な奴隷になって破滅することもなかっただろうし、Decoud にしても、虚無感にすっかり飲み込まれて自殺へ追いやられることを避けえたかもしれないものなのである。

結局私たちは、この真に懷疑する力を通して、Leavisや Warren が否定的に見ていた空ろさにまず到達しなければならないのではあるまいか。なぜなら、この空ろさの中に立って初めて、自由の道へ向かうことが可能になると思われるからだ。Nostromo において自由は一つの大きなテーマでありながら、ほとんどの場合 “a nightmarish meaning”⁴ しかもちえないのは、それが懷疑によって生み出された空白を基盤にしていないからである。「自由」を叫びながら我欲の奴隷となって走り回る大衆はもとより、そのような大衆を嫌悪するイタリア統一運動のかつての闘士 Giorgio Viola でさえ、真の自由から遠い所にいるのは、彼らに自分の幻想を批判する力がないからである。ただ物語の最後あたりで、幻想の跳梁をつぶさに目撃した Gould 夫人と Monygham 医師だけが真の空ろさに到達しており、これは、Leavis の言う通り、空ろさを作品の世界全体に強く響かせている。この響きを Nostromo の世界に跳梁する様々な幻想の内に聞きとりながら、懷疑と自由の問題について以下考察してみたい。

II

まず、その呼び名が作品の題名となっている Sulaco の町の人気者 Nostromo の幻想と自由の問題から考えてみよう。彼は、真に懷疑する能力がないと物語の話者が考えている一般大衆の一人である (p. 420)。それゆえ彼に可能な自由は、徹底した懷疑の果てに得られるのではなく、自然的、無意識的に生まれるものである。例えばそれは、Nostromo のモデルになったと言われている地中海沿岸用小型船の船長 Dominic⁵ と青年時代の Conrad の関係に見られるような、海の男と男の間の深い信頼関係である (p. xii)。

この種の幸福な人間関係は、しかしながら、作品の世界から極力しめだされているように見える。恐らくそれは、人並み勝れた Nostromo でさえ、懷疑する力がなければ、大衆の宿命である “dying betrayed” (p. xiii) を避けえないとい

う作品の主題の一つを明確にするためであろう。世界を“rich”にしている様々な幻想を十分に懷疑できないため、それに乗せられ死に追いやられる大衆の宿命に、Nostromo も結局捕えられてしまうのだ。

Nostromo という名が作品の題名に選ばれたのは、恐らく、彼が幻想の典型的な犠牲者である大衆を代表しているからであろう。彼はまさにこの点で、“Heart of Darkness”の Kurtz や *Lerd Jim* の Jim と同じ血縁関係にあると言える。彼ら三人はいずれも、人並勝れた才能をもちながら、あるいはそれゆえに、やすやすと幻想の虜になり、その餌食となり果てたのである。彼ら三人から自由を奪い取ったのは、Giorgio Viola たち赤シャツ隊が Garibaldi に率いられて打ち倒そうとした圧政者よりはるかに手ごわい敵であった。なぜならそれは、意識をもつあらゆる人の心に巣食う幻想という名の独裁者であったからだ。この独裁者は、どんな人でもオウムの順応者にしてしまう圧倒的な力をもつ。それは、大衆はもとより、人間心理に深い洞察を見せる Decoud や Monygham のようなインテリたちすべてを捕える力をもっているのだ。あらゆる階層の人を捕えて突き動かし、少なくとも表面的に世界を“rich”にする力をもつのである。

この幻想という独裁者の典型的な犠牲者になる Nostromo は、物語の初めでは、Sulaco の町で一番頼りになる男という名声を享受しながら、それを維持することに懸命になっているまだ年の若い沖仲仕頭である。この彼を捕えていたのは *Lord Jim* の Jim にとり憑いたのと同じ名声という幻想なのだが、自分の名を一層高めようとして銀塊を港から運び出す大仕事をして以来、彼に新たに憑くのは富の幻想である。その大仕事を今までで“the most famous and desperate affair” (p. 265) にしようとしてある程度成功したにもかかわらず、町が銀を血眼になって探し求める悪党たちに占領されたため、彼は、自分が人々から賞讃されるどころか逆に密告されかねない立場に立たされていることに気づく。名声どころか無一文になって人目を避けねばならなくなった彼の心に、自分が金持から利用されただけではなかったのかという不信の念がまず芽生え、それから徐々に Great Isabel 島に隠した銀塊の魅力がとり憑き始めるのだ。このとき Nostromo は、真に懷疑することを知らない大衆の弱点を典型的にさらけ出していたと言えよう。間断なく次々と幻想の奴隷になっていく大衆の姿が、ここで如実に観察できるのである。

名声という幻想に幻滅しながら Nostromo がすぐに富の幻想に囚われるのは、銀の魔力がそれほど強力であったということのほか、死の床についていた Viola 夫人から彼が呪いをかけられたからでもある。ここでも彼は、迷信に囚わ

れやすい大衆の心を代表していると言えよう。Viola 夫人は、息子のように面倒を見てきたNostromo をいずれ長女 Linda と結婚させたいと考えていた。そのため彼が皆からちやほやされるのが気に入らず、空疎な賞讃の言葉に振り回されていると言って彼を嘲笑する。しかし、そう言う彼女自身が実は、彼の評判の魔力に囚われ、まだ幼い娘を任せられるのは彼だけだという固定観念に憑かれていたのだ。その固定観念は今は際に特に強力になり、その完全な奴隷となりはてた彼女は、彼を自分の許に繋ぎとめておくため無理を承知で牧師を呼んできてくれと彼に頼む。すぐにも港から銀塊を積んだ舢舺を出さなくてはならない Nostromo は、暴動で牧師を連れて来にくいこともあって、この頼みを断るのであるが、その彼に Viola 夫人は、“Your folly shall betray you into poverty, misery, starvation. These very lepros shall laugh at you—the great Capataz.” (p. 267) と呪いをかけるのだ。

この呪いが現実には不吉な力をもたらすのは、Nostromo が名声をすっかりなくしたと思いきみ無一文の状態ですべて町に戻って来たときである。飢えて死ぬだろうという夫人の呪いが今にも実現されそうな危機感を彼はこのとき抱くのだ。その呪いを確実に打ち破ってくれるものとして、彼が Great Isabel 島に隠した銀塊のことを思い出すのは当然であろう。それがやがて強力な固定観念となって彼の心に住みつき、彼をその奴隷にし、最後に裏切られて死ぬ大衆の宿命を彼に辿らせるのである。

また Viola 夫人の呪いは、Nostromo の心に富の幻想がとり憑くのを容易にしたばかりではない。それはまた、彼の名声を決定的に高めた Cayta 行きを彼に決行させる要因ともなったのだ。Cayta 行きは、彼が Monygham から要請されたとき、すぐ承諾されたことではなかった。むしろ、Monygham の不用意な言葉によって金持への不信感を一層募らせた Nostromo は、そこへ行くことを仲々了承しなかったのである。その彼の気持を変えたのは、Giorgio Viola から聞いた Viola 夫人の最期の言葉である。彼女は死ぬ直前に二人の娘のことを彼に頼んだのだ。娘たちはそのとき金持を代表する Gould 夫人が保護していたため、Nostromo は金持の下僕になるのを嫌いながら、Cayta まで行って Barrios將軍を連れ帰る決心をするのである。

この Cayta 行きこそ Nostromo の人生で “the most famous” な手柄になるのであるが、皮肉なことに、そこへ行く彼の心を支配していたものが名誉を求める気持でも正義感でもなかったことは、今まで見てきた通りである。彼がそのとき一番考えていたのは、Viola 夫人の呪いを和らげたいということだったのだ。もちろん彼は、Giorgio Viola やその娘たちの身の安全のことも考えただろうが、

彼の心を最も強く捕えていたのは、やはり、Viola 夫人の死に際の呪いと頼みの言葉だったのである。

結局 Nostromo は、最初から最後まで囚われの人であった。彼の名が題名となっている Nostromo の世界は、囚われの人であふれていると言える。Nostromo のような大衆だけでなく、後で述べるように、Decoud や Monygham も、いや Gould 夫人でさえ幻想の虜になることを免れえなかったのだ。それは、私たちが宿命的に受ける“illusions”の支配を空無化する懷疑力が彼らに十分でなかったからである。懷疑の失敗は、当然のことながら、Decoud や Monygham のようなインテリにおいて特に痛切に感じられる。次に、彼らのうちで自分に対する幻想に比較的囚われやすかった Decoud の懷疑の失敗についてまず考えてみたい。

III

Nostromo が懷疑を知らない大衆の一人として幻想の奴隷となり死に追いやられたのに対し、Decoud は、懷疑するインテリを代表するような人物でありながら、やはりある固定観念に囚われて自らの手で死を招いてしまった。多くの批評家はこれを Decoud の懷疑的な性格による悲劇と見ているが、逆に、真に懷疑する力が足りなかったために起きた悲劇と見ることもできはしまいか。つまり、もっと疑う力をもっていれば、彼は Great Isabel 島で虚無的な感情に飲みこまれて死ぬこともなかったのではあるまいか。

より懷疑的な Decoud というこの考え方は、Albert J. Guerard が私の考とは全く逆の意味で提示している。Guerard にとって“an even more skeptical Decoud”というのは、“I am not so much of an unbeliever as not to have faith in my own ideas.”と言う Decoud のことである。⁷これはしかし、“even more skeptical”どころか、他人に厳しく自分に甘い egoist の言葉とも受けとられかねない。実際 Decoud には、他人が抱く幻想の愚かしさはよくわかっていても、自分が抱くそれには批判的になりえないという、誰もが陥りがちな欠点があった。

例えばその欠点は、鉄道工事のため Sulaco に来ていたある若いイギリス人技師の自己中心性に Decoud が強く反発するときに見られる。この技師は、Gould 夫人や Decoud たちが Barrios 将軍の出征を見送って帰る途中 Viola の経営する宿屋に立ち寄ったとき、夫人を見かけて挨拶し、次のように言ったのだった。

It's a delightful surprise to see you, Mrs. Gould. I've just come down.

Usual luck. Missed everything, of course. This show is just over, and I hear there has been a great dance at Don Juste Lopez's last night. Is it true? (p. 168)

この若い技師にとって、Sulaco の危機をぜひとも救わねばならない Barrios 將軍の出征は“show”であり、ダンス・パーティと同じ次元にあるものでしかない。イギリス本国では気の良い若者で通ったかもしれないこの男が、南米に来て自分でも気づかぬうちに体現していたのは、世界で最も強力な国の国民であることの優越性である。彼はまだ自分が若年ながら重要な国家的事業に参加させられていることを大変な幸運だと思っており、それゆえ“down with Montero !” (p. 169) だと公言する。目の前にいる Sulaco の人々のことを心配してではなく、イギリス帝国主義に貢献する自分の仕事の継続を願っての“down with Montero”なのだ。この無邪気でかつ恐るべき自己中心性が Gould 夫人たちにどのように受けとめられたかも察知できない青年は、皆が黙ったまま答えてくれないのに面くらう。そして、“The stares of these creoles did not matter much ; but what on earth had come to Mrs. Gould.” (p. 169) と、あからさまな差別意識に囚われた考え方をするのである。

Creoles の一人である Decoud には、人種差別をする側の頂点に立つイギリス人が自らの立場を全く疑うことなしに無邪気な egoism をさらけ出すのを見るのは、とても耐えられないことである。その青年技師と別れたあと彼と同国人の Gould 夫人に向って Decoud は、蔑視された Creoles への愛を爆発させ、スペインの植民地がイギリスやフランスの海賊に荒らされてきたとか、“We are a wonderful people, but it has always been our fate to be . . . exploited.” (p. 174) と言ったりする。しかし、そう言う彼自身が“*We*”を Creoles に限定しており、インディオや黒人たちを除外していることに全く無批判なのだ。中南米では、西欧から来た白人を除けば Creoles が差別構造の頂点に立っていることに、なぜ Decoud ほどの知性の持主が気づかないのだろうか。これに気づけば、彼は、中南米を征服していった自分たちの祖先のことにまで言及せざるをえなかっただろう。たまたま今搾取の頂点にある国民の無批判な利益享受の姿勢が疑われるのなら、かつてスペインが世界の搾取の頂点にあった時代の恩恵をいまだに受けている中南米の Creoles 自身の立場も疑われねばならないだろう。

しかし Decoud にはそこまで疑える知性はなかった。そこまで疑って人間を見い出そうとする知性は、彼がついにもちえなかったものである。これに対して Gould 夫人には、あの青年技師はまだ年が若いのだと言いうるやさしさがあつた。

そのやさしさは、同国人の青年技師よりむしろ Decoud に向けられていたのだ。彼女には、Decoud の義憤がどれほど独善的であるかを指摘できる知性はなかったかもしれないが、彼が感情の虜になっているということだけはわかったのである。彼女にはそれがほとんど直観的にわかったのであり、それゆえ彼女は、悲憤慷慨する Decoud を軽くなだめて落着かせ、彼を感情に囚われた状態から解放したいと思ったのだ。

このような女性的なやさしさをもたない男性 Decoud が、Gould 夫人の人間を見失うまいとする姿勢に彼なりに近づこうとすれば、幻想に囚われた人の虚妄性をしばしば鋭く暴き出した彼の優れた懷疑力を、まず自分自身へ向けなければならなかっただろう。しかし、彼にはついにそれができなかった。彼はついに自分の感情を疑うことができなかったのである。彼が Great Isabel 島で虚無的な感情にとり憑かれた自分をどうすることもできなかったのは、彼のこのような知のあり方からみて当然のことだったと言えよう。それは懷疑主義の行きついた所ではなく、逆にその重大な失敗であったと思われる。幻想に囚われた状態から真の自由へ人を解放する強靱な懷疑力をもつことに失敗したためだと思われる。

こうして真の懷疑は、Decoud にも果たされないままである。彼の懷疑は、幻想の虜になった他人を批判する力としてはかなり有効に使われながら、最も重要な瞬間に、すなわちほかならぬ自分自身が幻想の奴隷になってしまったときにその力を十分に発揮できなかったのだ。これと同じことは、自分を信用していない分だけ Decoud より一層懷疑的と言える Monygham 医師の場合にも起っている。次にこの Monygham の懷疑の失敗の跡を辿りながら、真の自由に到達することの困難さと重要性について考えてみたい。

IV

独裁者 Guzman Bento の時代に苛酷な拷問にかけられ友を裏切ってしまった Monygham にとって、強い疑いの対象にならねばならないのは、誰よりもまず自分自身であった。しかし、その彼が Gould 夫人に向かって自分より他人の方を “so much the better” と思えと言うのは “most unreasonable” (p. 45) だと言ったとき、彼は残念なことに、自分すら信じれない人間に何が信じれるかという切実な問題に直面しようとしていたのではなかった。

彼はこのときその問題に対する解答をすでに用意しつつあったのだ。すなわち彼は、美しい Gould 夫人の人柄に惚れこみ、やがて彼女のために自分の命まで犠牲にしようとするのである。彼がこの犠牲的な行動をとったのは、Sotillo と

Pedrito Montero が別々の方角から Sulaco の町に銀を求めてせめこんで来たときであった。二つの兵力が合体して強大になるのを防ぐため、Monygham は自らの命をかけて Sotillo の注意を銀に引きつけておこうとしたのだ。だがそのとき彼は、Gould 夫人を助けられるのは自分しかないという熱い自己犠牲の思いに囚われて、日頃の冷静さをなくしていた。それで、税関所で偶然出会った Nostromo がどれほど失意に沈んでいるかを思いやることができずに彼をただ Gould 夫人を助ける手段としてしか見なかったのである。肉体的にも精神的にも打ち砕かれた過去をもつ Monygham は、金持に対する不信感に囚われ自分を見失いかけている Nostromo の苦しみを誰よりもよく理解できたはずだった。だが、Gould 夫人の役に立ちたいという思いで一杯の Monygham は、一般の人々と同じように Nostromo の “established reputation” (pp. 432) を疑おうともせず、彼を “the only possible messenger to Cayta” (pp. 431—432) としてしか見なかったのだった。

だからこそ Monygham は、“It must have been terribly dark !” (p. 433) と、闇夜の Placido 湾に銀塊を積んだ舢舨を出した Nostromo の命がけの仕事の困難さに同情を寄せ、彼の気持を和げながら、すぐその後で “I could almost wish you had shouted and shown a light.” (p. 434) と言ってしまったのである。彼はこのとき、Sotillo が Nostromo の舢舨を見つけて銀を奪い取り、よその国へ立ち去ってくれさしていたら、弱い兵力しかもたない Pedrito Montero を倒すことだけを考えればよかっただろうと思っていたのだ。その言葉が Nostromo にとって “I wish you had shown yourself a coward.” (p. 434) に等しい意味しかもたないということなど、Monygham には思いもよらなかったのである。

結局 Monygham は、絶対に悪党の手に渡してはならなかった銀が今ではむしろ奪われた方がよかったかもしれないものになっていることを Nostromo に知らせ、彼の金持連中に対する不信感をますます募らせてしまう。その結果彼は、今度は逆に Nostromo から、金持の味方をしようとしている自分の虚妄性を暴かれてしまうのだ。すなわち、彼が Sotillo に銀略奪の希望を抱かせ続けたために、Hirsch という一人の罪のない毛皮商人が拷問にかけられて殺されたと Nostromo から指摘されたのである。この鋭い指摘に Monygham は、“Anybody can see that the luckless wretch was doomed from the moment he caught hold of the anchor.” (p. 439) と、良心の痛みを完全に無視する暴言を吐いてしまうのである。

この Monygham が Nostromo から “a dangerous person in more than one sense.” (p. 456) と思われるのは当然であろう。Monygham は、利己的である

からではなく、自分の命さえ犠牲にしてもかまわないという愛他的な幻想の奴隷になっているがゆえに、幾重にも危険な存在になっているのだ。それが特に危険であるのは、醜い利己主義とは異なり、愛他主義の美しさをまとっているからである。それだけにそれは人を、特に疑う力もあまりもたない大衆を巻き込む力が強いのだ。Nostromo が Monygham を “the worst despiser of all the poor” (p. 518) と見るようになるのは、決して根拠のないことではなかったのである。

人間性に対する深い洞察力をもった Monygham でさえ人間を見失うことがあるということを知るとき、私たちは Leavis の言う空ろさを一層強く感じざるをえない。が、この空白感は、生の徒労感に繋がるものでは決してない。むしろ逆に、真の自由を実現することの困難さを徹底して突きつける Conrad には、透徹した理性によって自由へ至らんとする強い決意が感じとられるのだ。Conrad の懷疑が人間を消去するものではなく逆に見出すものだというのは、まさにこの意味においてである。Monygham のように立派な人でさえ、いや彼のように愛他主義に走れる人だからこそ一層必要とされる懷疑とは、最初に述べた “the agent of truth” としての懷疑である。それは、幻想に囚われて人間を見失う危険に常にさらされている私たちを、幻想の網から逃れさせて生の空ろさに至らせてくれるものである。そして、そこから人間に出会う努力をするよう私たちに求めるものである。

恐らく真の自由とは、このような懷疑の繰り返しという地道な努力を続ける中で断続的にしかえられないものだろう。それほど人間は、幻想という闇の中に絶えず閉される危険にさらされているのだ。この事情は、作中で最も卓越した人物である Gould 夫人にとっても決して無縁ではない。

V

Gould 夫人が Conrad の描く女性の中ではめずらしく実在感をもっているとは、よく言われることである。確かに彼女は、マドンナのような慈悲心をあらゆるものにふり向けながら、不思議に、この世の人であるという感じを失うことがない。その一つの理由は、彼女もやはり私たちと同じ幻想の犠牲者だという視点が、作者から見失われていないからだろう。

Gould 夫人をもその犠牲者の一人にした幻想は、彼女の夫にとり憑いたものと同じ富の幻想である。すなわちそれは、“Only let the material interests once get a firm footing. . . A better justice will emerge afterwards.” (p. 80) というものである。もともとこの夫妻は共に、富は第二義的であり、“their

vigorous view of life” (p. 74)こそ成就すべきだということをわきまえていたが、やがて、Gould 夫人でさえ最初 “the emergence of a principle” (p. 107)のように思った銀塊が次々に産出されてくるに及び、夫の Gould はその魅力にとり憑かれるようになる。そして、妻とゆっくり語り合うひまさえ惜しんで鉱山へ赴くようになり、その結果念願の “the material interests” のための “firm footing” を築くことに成功するのであるが、そのとき彼はすでに鉱山の完全な奴隷になり下がっており、本来の目的だった “better justice” のことを考慮するゆとりを完全に無くしていた。

Gould 夫人の生の基盤はこの夫の富への完全な隷属化に空ろにされていくのであるが、その空白化の提示の仕方に、Conrad の “something radical”⁸ ははっきりあらわれていると言えよう。Gould 氏にもっと思いやりがあって、夫人の個人的な悩みが解消されても、依然として残る富の非人間性と残虐性の問題をはっきり私たちに提示するために、Conrad は Gould 氏を徹底的な富の奴隷にしたのだと思われる。それは、“material interests” を追求する社会に生きる私たちに、その社会の原理そのものを疑わせることによって、生を少しでも人間的にするよう求める Conrad のいかにも彼らしい厳しさを秘めた人間性希求の表現だと言える。

Gould 夫人は、夫が富の忠実な下僕になるのを目撃して、自分たちが誤った幻想に囚われていたことに気づき始めるが、この幻想からの覚醒を一層強めるように Monygham は、彼女に向かって次のようにその幻想の非人間性と残酷性について説明する。

“There is no peace and no rest in the development of material interests. They have their law, and their justice. But it is founded on expediency, and is inhuman ; . . . Mrs. Gould, the time approaches when all that the Gould Concession stands for shall weigh as heavily upon the people as the barbarism, cruelty, and misrule of a few years back.” (p. 511)

物質的な繁栄がもたらされても、Gould 夫妻が望んでいた “better justice” はその後からやって来なかった。やって来たのは、ある意味では昔の圧政よりもっと強力な隷属化だったのである。なぜなら、富は、王や独裁者のように外から人を支配するだけでなく、内から人を捕えていくからだ。その豊かさ、華やかさにだまされて、人は自ら進んでその奴隷になろうとするからだ。それゆえ人は、富の幻想にとり憑かれながら自分が隷属状態に置かれていることも意識できず、富の圧制下での自由を求める戦いは最初から絶望的なハンディを負わされているの

である。

しかしそれでもなお、自由への道が完全に閉されているというわけではない。富の幻想から解放された Gould 夫人が “the degradation of her young ideal of life, of love, of work” (p. 522) の中を一人で生き残っていく自分を意識するとき、かすかながらその道は見えてくるのである。確かにそれは、いかにも弱々しい感じがするかもしれない。銀山に奪われた夫を自分の手に取り戻す術など全く知らない彼女に一体何ができるだろうかと思われるかもしれない。Leavisの言う空白感がこのときほど強く感じられるときにはないようにも思えてくる。しかし、まさにこのとき私たちは、Gould 夫人と共にあらゆる幻想から解放されて生の空白を見つめて立っているのだ。真の自由の基盤となる空白状態の中に立って、私たちの生を透視しているのである。虚無感に似ているが不思議に充実したこの感情に私たちは、身も心も空ろになっていくのを覚えながらそれを日常生活の間隙にあらわすだけで消滅させてしまうことが多い。が、Gould 夫人の場合のように、富の幻想に完全に隷属している夫を毎日直視することによって生の空白が日々自覚されてきて空白感が生の基盤になってくるときには、確実に何かが変わっていくのではあるまいか。もちろん幻想は常に空白を満たそうとして侵入し続けるだろう。が、そのたびに基盤となった空ろさに立ち返るなら、私たちの生を曇らせているものの正体も明らかとなり、それに対する戦いも可能になるのではないだろうか。このことを *Nostromo* は、全篇に空ろさを響かせることによって、私たちに伝えようとしているように思われる。

Notes

- 1 F. R. Leavis, *The Great Tradition* (London : Peregrine Books, 1962), p. 221.
- 2 Robert Penn Warren, “On *Nostromo*”, first published in the Modern Library edition of *Nostromo* (1951), as Introduction, reprinted in *The Art of Joseph Conrad : A Critical Symposium*, ed. R. W. Stallman, (East Lansing, Mich. : Michigan State Univ. Press, 1960), p. 218.
- 3 G. Jean-Aubry, *Joseph Conrad : Life and Letters* (London : Heinemann, 1927), Vol. I, p. 301.
- 4 Joseph Conrad, *Nostromo* (London : Dent, 1947), p. 408.
以下、*Nostromo* から引用の頁数は本文中に示す。
- 5 Norman Sherry, *Conrad's Western World* (Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1971), pp. 162—5.
- 6 Decoud の scepticism を 少し弱めることにより大きな価値を認める F. R. Leavis

や Albert J. Guerard の他に、例えば H. M. Daleski は、*Joseph Conrad : The Way of Dispossession* (London : Faber and Faber, 1977) において、“Having surrendered himself to his scepticism, . . . he is reduced to nothing when deprived of objects on which his intelligence and passion can play . . .” (p. 139) と述べている。

7 Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (Cambridge, Mass. : Harvard Univ. Press, 1958), pp. 200—201

8 Leavis, p. 221.

(昭和58年10月27日受理)